



からしだね

2023年2月号
(589号)

キリストの受難 カトリック池田教会

主任： 中村克徳司祭

住所： 〒563-0041 池田市満寿美町9-26

TEL： 072-751-2400 FAX： 072-753-4624

URL(ホームページ)： <http://catholic-ikeda.sakura.ne.jp/church/index.htm>



本号の記事の主題など

巻頭言 多様性と一致の実現を目指して
染野治雄 神父

2月のガラスケースのみ言葉と解説

今月の表紙の絵について

四旬節黙想会のお知らせ

宝塚黙想の家からのお知らせ

みんなの談話室

新「ミサ式次第」の"思い出"

五月山公園でアラカシやモチノキの大木に会う

いま、様々な機会にSDGsという言葉聞きます。マスコミはもちろん、阪急電車にもSDGsトレインというのが走っていました。ご存じのとおりSDGsとは「Sustainable Development Goals: 持続可能な開発目標」のことです。そこには17の目標が掲げられていますが（個々の説明については他に譲ります）、これらの目標の共通の基盤となっている考えが、“多様性”です。

“多様性”とは、教会のあり方としてすでに聖書の中で語られています。たとえばパウロはコリント書で、「あなたがたはキリストの体であり、また一人一人はその部分です。・・・第一に使徒、第二に預言者、第三に教師、次に奇跡を行う者、その次に病気をいやす賜物を持つ者、援助する者、管理する者、異言を語る者などです」（Iコリント12.27）と語ります。また「体の中でほかよりも弱く見える部分がかえって必要なのです」（Iコリント12.22）とも言っています。



これからもわかるように、多様であること、一つであることは、どちらも教会の本質を表す言葉であり、現実です。『カトリック教会のカテキズム』によれば、「一つである教会は、最初からかなりの多様性を表しています。それは、神のたまものが多種多様であり、これをいただく人々が多様であることに由来します。・・・このように多種多様な様相は、教会が一つであるということに反するものではありません」（813、814項）と書いてあります。教会のあり方として“多様性における一致”といわれるゆえんです。イエス様ご自身、“キリストはぶどうの木”のたとえで語っておられるとおりです（ヨハネ15章参照）。

こうして、あらゆる違いや対立、矛盾を越えて、神のもとですべてが良いものとして一つになるとき、神が「すべてにおいてすべてとなるとき」（Iコリント15.28）多様性が尊重される社会が実現します。そのためには、わたしたち一人ひとりが、多様性に向かって心を開く必要があります。多様性が実現した社会・教会はわたしたちの心のあり方にかかっているとと言えます。別の言葉で言えば、寛容の心をもって聞く耳を持つものになることです。とはいえ現実にはいろいろ難しさもあるでしょう。もしできていれば、神の国はとっくに完成しているはずです。また、多様性を金科玉条として他の考えを排除しようとするのも本末転倒です。多様性という言葉自体もまた多様であることを受け入れなければなりません。いずれにしても人間の力だけで出来ることではありません。だからイエス様に「十字架によって敵意」という悪を滅ぼしてもらったのです（エフェソ2.16）。

世界は今までになく、格差と分断という名の悪に脅かされています。この悪はわたしたちの心に簡単に忍び込んで扉を閉ざしてしまいます。だから、イエスの十字架が今も必要なのです。こうしてわたしたちはいつくしみと寛容の備えをもって、多様性と一致の実現にむけて、混沌としたこの世と言う荒れ野へともに出て行くのです。

2月のガラスケースのみ言葉

疲れた者、重荷を負う者は、だれでもわたしのもとに
来なさい。休ませてあげよう

マタイ11章28節

2月のみ言葉についての解説

中村克徳 神父

慌ただしい年の瀬を過ごしているうちに年が明け、2023年を迎えました。昨年を振り返ってみると、先の2年間と同様に、コロナウィルスの脅威に振り回された1年であったと言えるでしょう。誰もが、何を為すにも感染対策を念頭に置いて計画を立てなければならず、泣く泣く中止にせざるを得なかった行事や集いも少なくなかったのではないのでしょうか。今年こそはウィルスの問題が解決して、以前と同じような生活に戻れることを願っていますが、そのような希望すら打ち消されるような状況に嘆息をついているのが現状です。わたしたちはどのようにして、この時代を乗り越えていけば良いのでしょうか。

3世紀に、現在のリビア地方で栄えたカルタゴの地で活躍した、殉教者聖チプリアーノという聖人がいました。彼は35歳でキリスト教の洗礼を受け、短期間のうちに司教に選任されてカルタゴ地方の教会を導く務めを任されました。厳しい迫害の嵐が吹き荒れた時代です。彼の任期中には、デキウス帝の迫害（250年）とヴァレリアヌス帝による迫害（257～258年）が猛威を振るい、多くの人々がそれに耐えることができずに背教していきました。しかし、迫害が静まると彼らは教会に復帰することを切望したのです。彼らの復帰を認めるか否かについて、教会は容認派と拒絶派との2つのグループに分かれて、互いに対立し話し合いは紛糾しました。聖チプリアーノ司教の基本的な姿勢は厳格なものでしたが、罪を告白し、教会が定めた然るべき償いを果たすことで、彼らに教会への復帰を認めたのです。

こうした一連の迫害の経験を踏まえて、彼は教書の中で「教会の外に救いなし」という言葉を残しました。この言葉は後に切り取られて独り歩きすることになり、カトリック教会の傲慢な姿勢の象徴として数多くの批判を受けることとなりました。しかし彼は、他の宗教に属する者や、キリストに出会うことなく生涯を終えた人に対して語ったのではなく、一度イエス・キリストに帰依した者が教会の外で救いを探し求めても、そこには真の救いに至る道は存在しない、という意味で、この言葉を残したのです。彼は迫害の渦中で混乱した教会を司教として福音の教えに照らして力強く導き、精力的に働き続けました。その最中に、ローマ総督から遣わされた兵士によって捕らえられ、尋問を受けた後に殉教しました。

イエス・キリストは自分を頼って各地からやってきた人々を前にして、次の言葉を残しています。「疲れた者、重荷を負う者は、だれでもわたしのもとに来なさい。休ませてあげよう」。聖チプリアーノ司教は、教会に戻りたいという切なる思いを抱く人々に対して、この聖句を思い起こしていたのではないのでしょうか。

教会はイエス・キリストの体にたとえられます。混迷した希望の見えない現代に生きるわたしたちも、イエス様のこの言葉に信頼を置き、神の国での永遠の救いを目指して力強く歩み続けていきたいものです。

今月の表紙の絵について

2月2日（木）は主の奉献を祝う日である。

ルカによる福音によると、ベツレヘムでお生まれになったイエスは、誕生して8日目に割礼の日を迎え、イエスと名付けられた。さらに清めの期間が過ぎたとき、「両親はその子を主に捧げるため、エルサレムへ連れて行った。それは主の律法に、『初めて生まれる男子はみな、主のために聖別される』と書いてあるからである。また主の律法に言われるとおりに、山鳩一つがいか、家鳩の雛二羽をいけにえとして捧げるためであった。」

（ルカ22：22～24）

お宮参りを連想させる、ほほえましいエピソードであるが、わたしたちはアブラハムが、神に命じられるまま長子のイサクを生贄として捧げようとした物語をも思い出す。神への究極の捧げものとして、大切な長男を焼き殺す風習が、古代の地中海地方では一般的におこなわれていたという。紀元前15世紀頃から栄えたフェニキア文明の遺跡では、たくさんの幼い子どもたちの墓が見つかっている。アブラハム以後、ユダヤではそのようなむごい風習が消え、律法に従い、幼いイエスの場合は、鳩が身代わりに焼かれて神に捧げられた。イエスは幼くして神に捧げられ、そして十字架の死によりもう一度神に捧げられた。

表紙の絵はイタリアのルネッサンス期に活躍したヴェネツィアの巨匠、ティントレット（1518～1594）が1590年頃に描いた作品で、ヴェローナにあるカステルヴェッキオ美術館に收藏されている。Saikoによる撮影。

四旬節黙想会のお知らせ

本年の四旬節黙想会は四旬節第2主日（3月5日）に野田正弘神父様（カトリック豊中教会）の指導で行われます。

黙想主題などの詳細は聖堂玄関に掲示いたします。

研修委員会

宝塚黙想の家からのお知らせ

■ 日帰り黙想会 10：00～15：30

2月 9日(木) 指導：染野 治雄 神父

2月24日(金) 指導：山内 十束 神父

■ 一泊黙想会

2月24日(金) 17：00～25日(土) 15：30

指導：染野 治雄 神父

■ カトリック教会のカテキズム

2月 8日(水) 10：00～12：00

2月22日(水) 10：00～12：00

指導：染野 治雄 神父

■ 聖地エルサレムを学ぶ

2月 9日(木) 10：00～12：00

指導：笹田六合豊 修道士

■ ギリシャ語で味わう聖書のことば

2月 7日(火) 10：00～12：00

指導：稲葉 善章 神父

■ 聖書の基本

2月 1日(水) 10：00～12：00

指導：山内 十束 神父

上記の各黙想会、費用等のお問い合わせは「宝塚黙想の家」まで。☎ 0797 (84) 3111

みんなの談話室

新「ミサ式次第」の“思い出”

M. Y.

変わったタイトルですが(始まったばかりの新「ミサ式次第」になぜ“思い出”?), 間違いではありません。

今から35年前、当時勤めていた銀行から2年間の「海外トレーニー」(教育研修)を命じられ、生まれてはじめて海外渡航しました。最初の2か月間はアメリカ五大湖の一つスペリオール湖畔のダルースという町(ミネソタ州)に滞在し、いきなり地元大学の夏期授業にポツリと一人参加することになりました(「英語脳」になるための一種のショック療法?)。

「海外トレーニー」も米国行きも、元々自ら名乗り出たことだったので、それ自身は喜んでいたのですが、そもそも海外どころか地元関西すら離れて住んだことがなかったので、個室の学生寮で一週間も経たないうちに、てきめんホームシックになりました。

インターネットもない時代、ダルースのカトリック教会事情を予め知るよしもありませんでしたが、代わりにぶ厚い「業種別電話帳」というものが日本同様ありました。その「教会」の部を調べると、カトリック教会も歩いて行ける距離(これが米国では結構難しい)にありました(神に感謝!). そして片道40分かかってたどりついたのが、「海の星聖マリア」(St. Mary Star of the Sea)という名のカトリック教会(元はポーランド人系)でした。

そして、この教会の御ミサで新「ミサ式次第」の英語版を体験することになっ

たのです。池田教会の皆さん方が今感じておられることと多分似ていて、一番明瞭に「違っているなあ」と感じたのが、長い使徒信条、そして聖体拝領前の「百人隊長」(ルカ7章)の信仰告白でした。

長い使徒信条をそらんじて大きな声で唱和する皆さん方が、拝領前の信仰告白では“Lord, I am not worthy to receive you, but only say the word and I shall be healed”と謙遜に懇願し感謝する、そのことに強い印象をおぼえるとともに、自分も「今、米国暮らしや英語にどれだけ不慣れで至らない者であっても、御聖体に等しくあずかって良いのだ」という気持ちと感謝をおぼえました。

その後2年間、英語で新「ミサ式次第」の御ミサにあずかることになったのですが、「百人隊長」信仰告白を唱えるたび、あのダルースの教会での「初心」が心をよぎりました。その後日本に戻り、ごくたまに米国に仕事で行く時以外はその信仰告白を唱えることがなかったのですが、今またそれを唱えることができるようになり、(多分少数派でしょうが)内心幸せに思っております。

この拙文がわずかでも、新「ミサ式次第」への親しみが増すための助けになれば、大変うれしいです。なお当時、ミサの言葉と並び、小生が大変感動した海の星聖マリア教会の見事な祭壇飾りは、今ではインターネットで見ることができます (<https://duluthcathedral.com/> トップページの右側中ほど)。



五月山公園でアラカシやモチノキの大木に会う

T.O.



五月山は池田市民のみなさんにとっての最も身近な公園であって、少なくとも春の桜の見頃に一度は訪れたことがあるところでしょう。1月17日の9時頃に阪急バスの五月丘五丁目バス停で下車して、池田市都市緑化植物園（緑のセンター）裏から2つの分岐の右の小径を選ぶと、夏に大文字の灯がともる地点に至る。池田市街や伊丹空港方面や大阪市内の高層ビルや六甲の山々の遠景を楽しんで、再び小径を歩めば五月高原コース分岐の小道に至る。そこから高原

コースを行くと近くには10mから20mの高さの樹木が連なり、眼の高さより僅かに上にある樹木名板に書かれた名はモチノキやアラカシなどと池田教会の敷地にも2本や3本もある聞きなれた樹木名である。しかし、その高木の全体を見るとこれがその自然の樹形であるのであろうとすぐに合点した。樹肌を見れば、モチノキは灰色ですべすべしているし、アラカシは縦に割れこんでいるが、幹も幹から別れた枝の全ても斜め上に真直ぐに伸びているからである。その樹高は教会にある木々のそれより3倍～4倍も高く、最高では20mを越すような高さから地面近くの私を見下ろしてくれている。また、池田市内の公園や私邸にあるヤマモモは白い肌をしているが眼が届くところの樹肌には黒色の瘤がかつての剪定の傷痕として残って可哀そうに見えるのだが、五月山ではどの幹も白いストッキングを履いたように美しい木肌である。

瓢箪が横に伏せたような瓢箪島と名付けられた広場はその周りを高木が取り巻いていて奥山に紛れ込んだような錯覚を覚えた。上の2枚の写真はそこから降る小径に面したきれいなブナやアラカシが並んでいた。その降る小径は少し荒れているのでおしゃれな靴だと歩きにくいかもしれない。再び池田市街や猪名川、伊丹空港、六甲山などの展望台もある。出発した緑化植物園に戻り、そこからバス停のある道までの舗装道の南面には1月には全く落葉した20mの高さの樹木の幹や枝の間から池田の街並みが透けて見える。その山側の高所には「プラネタリウムはココ」と書いた大きな看板もあった。ゆっくりとした散歩であったが、時刻は12時には間があった。

編集後記

3年前に新型コロナウイルス感染症に襲われたわたしたちは強い恐れをいだき、1年前にはロシアによるウクライナ侵攻が始められて久しい今は、それらを拡大させるのではなく、如何に終息させるかという課題が論じられるようになった。しかし、逆に台湾や日本の南西諸島と中国間における海峡では長い間大事にしていた日常の互いの思いやりや平和から決別して、争いを恐れず、分断もやむなしと断定して、乱暴な決断を迫る声も大きくなり、更なる衝突の拡大を煽る動きも目立つようになった。

本誌「からしだね」の本号の御受難会司祭方がたによる巻頭言とガラスケースのみ言葉とその解説を読むと、わたしたちは平安の恵みを受けている幸せを強く感じる。更に、2020年3月に本誌に掲載された司祭の呼びかけ「みなさん お元気ですか？」（本誌584号の資料に再掲）は今でもわたしたちの心を安心へと誘ってくれる。

神に感謝！

インマニエル